

4. 遺跡の重要性と保存管理の現状

メンフィス・ネクロポリスの概要

近藤 二郎*¹・河合 望*²

1. はじめに

メンフィス・ネクロポリス遺跡は、エジプトの首都カイロから南西に位置する砂漠に広がる巨大な墓地群である。この遺跡は、エジプトで最もピラミッドが集中する世界最大の墓地遺跡であり、1979年に「メンフィスとそのネクロポリスーギザからダハシュールにかけてのピラミッド地帯 (Memphis and its Necropolis-The Pyramid Fields from Giza to Dahshur)」としてユネスコの世界遺産に登録された。

遺跡は、大ピラミッドで有名なギザ地区からダハシュール地区にかけての南北約30kmに及ぶナイル川西岸の緑地縁辺部に接する砂漠の段丘地帯である。この遺跡には大ピラミッドだけでなく、世界最古の大型石造建造物とされるジェセル王の階段ピラミッド(紀元前2650年頃に造営)をはじめとするピラミッドが集中して造営された地帯である。メンフィス・ネクロポリスは、カイロの南約2.5kmに位置する古代エジプトの首都メンフィスの墓域として第1王朝(紀元前3000年頃)から約3000年間にわたって発展した。メンフィス・ネクロポリスの重要な墓地区は、北から順にアブ・ロアシュ、ギザ、ザヴィエト・アル＝アルヤーン、アブ・シール、サッカラ、ダハシュールである。

以下、首都あるいは行政の中心地の存在した都市遺跡メンフィスおよび、その西方の砂漠に位置したメンフィス・ネクロポリスの各遺跡の概要を記す。

2. メンフィス・ネクロポリスの各遺跡の概要

(1) メンフィス (Fig.1)

メンフィスは、カイロの南約23kmのナイル川の氾濫原に位置し、東西約1.5km、南北約4kmの規模の遺跡である。現在のアザゼーヤ村、エズベト・ガブリ村、ミート・ラヒーナ村、バドラシーン村、シンバーブ村に位置している。この現在の遺跡の範囲は、おそらくプトレマイオス朝時代の都市規模の約10%にも及ばないと考えられている。

メンフィスという名は、南サッカラにある古王国時代第6王朝のペピ1世のピラミッドの名前、「*Mn-nfr* (メン・ネフェル、確固とした美しいの意)」に由来する。このコプト語の読みが「メンフェ」で、ギリシア語で「メンフィス」と呼ばれた。この「メン・ネフェル」が、ペピ1世のピラミッド都市を指すようになり、それが新王国時代第18王朝頃から、首都の名前を指すようになった。

第1王朝に首都が造られた際には、王宮の姿にちなんで「*inb-hd* (イネブ・ヘジュ、白い壁の意)」と呼ばれ、中王国時代にはこれ以外に「*ꜥnh-t3wy* (アネク・タウイ、二国を生きる者の意)」の名称も現れた。つまり、

*1 早稲田大学文学学術院教授

*2 早稲田大学理工学術院総合研究所客員准教授

メンフィスは、上下エジプトの境界にある中心地として重要な場所であったのである。

メンフィスについては、ヘロドトス、ストラボン、ディオドロス・シクルスなどをはじめとする歴史家や旅行家が記録を残している。

伝統的に、メンフィスは第1王朝の伝説の王メネスによって建設されたと考えられている。それ以降、古王国時代からプトレマイオス朝時代の終焉までにかけて首都あるいは行政の中心地として繁栄した。しかし、イスラーム時代になりアル=フスタートの要塞都市が建設され、それに引き続いてアル=カーヒラ（現在のカイロ）の発展とともに、メンフィスの都市機能は消滅していった。

最近のジェフリーズ（D. Jeffreys）の研究によると、第1王朝に建設された首都メンフィスの位置は、現在のメンフィスの遺跡とされているミート・ラヒーナ村よりも砂漠の縁辺部に近い現在のアブ・シール村のあたりであったと指摘されている（Jeffreys 1994）。この初期メンフィスの位置から、ナイル川の流路の移動にしたがい、次第に東に移動していったと考えられている。

現在のミート・ラヒーナ村に位置するメンフィスの遺跡の最古の集落址は第1中間期に年代づけられ、それ以前に年代づけられる遺構は確認されていない。最も多く調査が実施された場所は、メンフィスの主神プタハの神殿とその周辺にある遺構で、新王国時代以降に年代づけられている。また、メンフィスの遺跡は未発掘区が多く、その全貌は明らかにされていないが、ジェフリーズが指摘しているように、おそらく第1中間期以前の集落址は、現在のメンフィスの遺跡と西側の砂漠台地の間に位置していたと考えられている。

以下、現在確認できるメンフィスの主な遺構について概要を述べる。

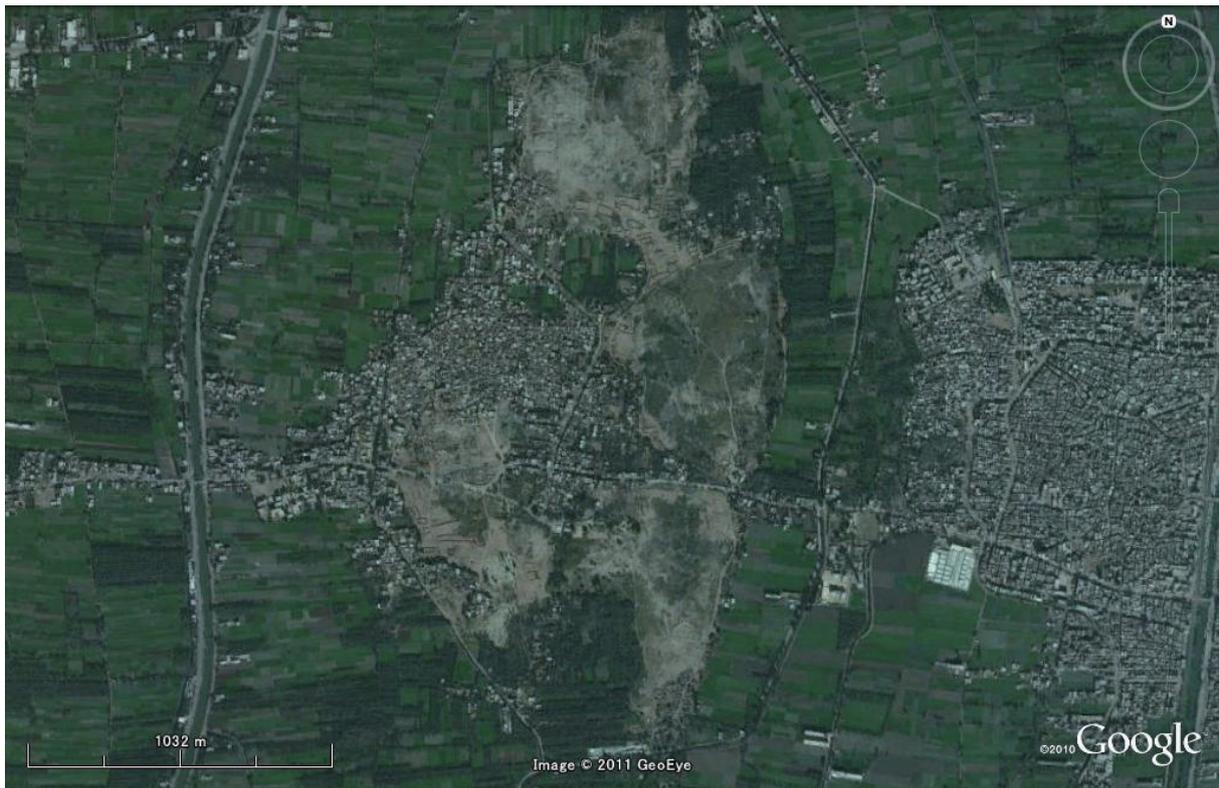


Fig.1 メンフィス衛星画像 © Google Earth

①プタハ大神殿址

プタハ大神殿は、メンフィスの主神プタハを祀るメンフィス最大の神殿である。この神殿の規模はほぼ明らかになっており、エジプトで最大規模のものと考えられている。プタハ大神殿の規模は、ルクソール東岸

のカルナク、アメン大神殿の最終的な規模とほぼ同じであったと考えられており、神殿の周壁内部の面積は275,000m²に及ぶ。しかし、神殿の西側の塔門と多柱室の詳細が分かっている以外は、内部の詳細な遺構の配置は不明である。神殿が村落に接近しており、発掘調査が困難であることもこのような状況の理由である。列柱室に通じる西の塔門は、ラメセス2世が建造したものであるが、周壁の他の場所でそれより古い時代の石材が発見された。例えば、第12王朝のアメンエムハト3世のまぐさ石、第18王朝のアメンヘテプ3世の石材などがある。塔門付近からはプタハ神の巨像や、ラメセス2世と神々の群像が出土している。

神殿域の南西角付近にはアピス牛のミイラ製作施設があり、石灰岩製や方解石製の解体用の寝台がある。ここで製作されたアピス牛のミイラは、サッカラへ運ばれ、セラペウムに埋葬された。この遺構の下には古い時代のアピス牛のミイラ製作施設があると考えられている。

また神殿域の南側にはハトホル女神の小神殿がある。現在は女神の顔を象った柱頭が残存している(Fig.2)。



Fig.2 メンフィス、ハトホル神殿址

②コム・カラ地区

プタハ大神殿域の西側に位置するコム・カラ地区には、メルエンプタハ王の王宮遺構と小さなプタハ大神殿の遺構があり、南部にはローマ時代のファイアンスの製作工房の址もある。また、プタハ大神殿域南西角に近いコム・ラビーア地区では、1980年代に英国エジプト探査協会(Egypt Exploration Society)による重点的な発掘調査が行われ、中王国時代から新王国時代にかけての集落の発展が明らかとなった(Jeffreys 1985; 2006)。

③アプリエス王の王宮址

プタハ大神殿域の北側には周壁に囲まれた末期王朝時代の遺構があり、第26王朝のアプリエスの王宮址であることが判明している。この王宮は、小高い丘の上であり、サッカラのネクロポリスを見渡せるように建てられたと考えられる。ここから出土したアプリエスの王宮址のレリーフ・ブロックは、サイス朝の芸術復興を強く示している。

メンフィスはプトレマイオス朝時代になると重要性が次第に失われ、新興のアレクサンドリアに大きく水をあげられた。そして、アラブによる征服後に現在のカイロにアル=フスタートが建設され、メンフィスは完全に廃墟と化した。メンフィスの廃墟は12世紀にはまだその姿を保っていたが、採石活動や肥料として使用された日乾煉瓦の入手活動のために破壊が進んだ。

現在、メンフィスでは英国のエジプト探査協会、ロシア隊、ポルトガル隊が調査を実施している。しかし、プタハ大神殿域では、近年調査が実施されておらず、地下水の上昇により地表面の高さが低いプタハ大神殿の塔門と列柱室の部分は部分的に水溜りとなっている (Fig.3)。湿度の高さが原因と思われるが、石材の表面は塩の結晶が析出しており、かなり危機的な状況であると言える。またその他の場所においても遺跡に対する保護・整備は組織的に実施されていない。



Fig.3 メンフィス、プタハ大神殿址

(2) アブ・ロアシュ (Fig.4)

メンフィス・ネクロポリスの最北部にある遺跡。ギザから北へ約8kmの場所に位置する丘陵ゲベル・アル＝ギギガ (Gebel el-Ghigiga) の一部である。遺跡は耕地から約150mの高さにある丘陵地の頂部に広がっている。遺跡は初期王朝時代からコプト時代まで多岐にわたるが、最も重要な遺構は、第4王朝第3代のジェドエフラー王のピラミッド複合体である。このピラミッド複合体は、1839年にハワード・ヴァイスとジョン・ベリングが初めて調査した。その後、1880年代に採石場として使用されたため、ひどく破壊されてしまった。1901年に、フランスのシャシナ (É.Chassinat) によってピラミッドの南側にある葬祭殿とポート・ピットが発掘された。なかでも、ポート・ピットからは赤色珪岩製のジェドエフラー王像を含む彫像片が発見された (Chassinat 1901)。

ピラミッドの北方には未発掘の河岸神殿の遺跡ワディ・カルンがあるが、この場所では初期王朝時代からコプト時代までの遺跡が調査されている。また、アブ・ロアシュ村の南東部では、初期王朝時代から古王国時代末に年代づけられる大規模なマスタバ墓群があり、フランス隊やオランダ隊により調査が実施された。

1995年から、フランス・オリエント考古学研究所とジュネーブ大学の合同調査隊が、ジェドエフラー王のピラミッド複合体 (Fig.5) の再調査を開始し、多くの重要な成果を上げている。調査隊によれば、ピラミッドの規模はギザのメンカウラー王のピラミッドとほぼ同じ大きさで1辺が106.20mで高さが約65.50m、そして傾斜角は $51^{\circ}57'$ であったことが判明している。これまでの調査により、ジェドエフラー王のピラミッドは、ザヴィエト・アル＝アルヤーンの北のピラミッドに類似していることが明らかとなっている。フランス・スイス合同調査隊による発掘調査と保存修復作業は現在も継続されている¹⁾。



Fig.4 アブ・ロアシュ衛星画像 ©Google Earth



Fig.5 アブ・ロアシュ、ジェドエフラー王のピラミッド衛星画像 ©Google Earth

(3) ギザ (Figs.6, 7)

現在のカイロの南西郊外の砂漠段丘に位置する古代の墓地遺跡。世界的に有名な古王国時代第4王朝のクフ、カフラー、メンカウラーの三大ピラミッドがある。現在わかっている最古の遺構はマスタバVで、第1王朝のジェット王の治世のものと考えられている。また、第2王朝の二ネチェル王の名前のある封泥も発見されたマスタバ墓もある。

クフ王の父スネフェル王は、ダハシュールに最初の真正ピラミッドを建設したが、後継者のクフ王が父王以上の巨大なピラミッドを建設するに足る土地はなかった。そこで、クフ王は、自らのピラミッドをギザに建設し、最大のピラミッドを造営することに成功した。ギザは、下エジプト第1州イネブ・ヘジュ（「白い壁」の意）の北端に位置しており、ナイル川を望む高台で、近くに石切り場のある岩盤の堅固な土地で、巨大なピラミッドを造営するのに適した場所であった。クフ王のピラミッドは今日大ピラミッドと呼ばれるが、本来はアケト・クフ（クフは地平線に属する者）と呼ばれていた。クフ王のピラミッド・コンプレックスは、ピラミッドと神殿の他に、王宮、行政施設、ピラミッド都市などの居住地を含む巨大な複合体であった。

クフ王のピラミッドは1個平均2.5トンの重さのある石灰岩ブロック約320万個使用して、作られていると考えられている。内部構造は非常に特徴的で、2つの玄室が構造部内部にあるのに加えて、地下に未完成の3つ目の部屋がある。上部の2つの部屋からは、それぞれ傾斜した狭いトンネルが作られている。これらの機能は不明であるが、便宜的に「通気坑」と呼ばれている。

クフ王のピラミッドの周囲には3基の付属ピラミッドがある。これらは王妃たちのために造営されたと考えられている。ピラミッドの東側には、葬祭殿址があるが現在は、玄武岩製の床が残存しているだけで荒廃している。河岸神殿は現在のナズレット・アル=スィンマンの集落の下に消え、河岸神殿と葬祭殿を結ぶ参



Fig.6 ギザ台地衛星画像 ©Google Earth



Fig.7 ギザ遺跡

道の石材はほとんど残っていない。このほかに、ピラミッドの周囲にはいくつかの船坑（ポート・ピット）があり、これらのうちの2つに船があることが確認され、そのうち1隻は復原されて、現在「太陽の船博物館」に展示してある。2隻目は現在早稲田大学が調査を行っている。

クフ王の後継者ジェドエフラ王は、前述のアブ・ロアシュにピラミッドを建設したが、ジェドエフラ王の死後、弟のカフラー王が即位し、カフラー王となり、再び父王のピラミッドがあるギザにピラミッドを建設した。カフラー王は経済的な理由からかピラミッドの一辺の長さを短くしたが、ギザ台地の標高の高い場所にクフ王のピラミッドよりやや傾斜角のあるピラミッドを建設した。結果として、父クフ王のピラミッドよりも高くそびえるような視覚的効果をもたらすことに成功した。カフラー王のピラミッドは、「カフラーは偉大なり」と呼ばれ、地下に玄室を配した古王国時代の典型的なピラミッドにより近い内部構造を呈している。カフラー王のピラミッドの北側と西側では、建設現場を平坦にするために岩盤を削った明白な痕跡がみられ、そこから取り除かれた石は、ピラミッドの石材として利用されたと考えられている。カフラー王のピラミッドの東には葬祭神殿が位置し、そこからさらに東に位置する河岸神殿に向けて参道があるが、東に一直線に延びているのではなく、やや南側に延びている。これは、河岸神殿の北西に位置する大スフィンクスとその東に位置するスフィンクス神殿との位置によるものと考えられている。大スフィンクスを造営した王については、クフ王説、ジェドエフラ王説、カフラー王説があるが、通説はカフラー王が作ったとするものである。スフィンクスは、カフラー王のピラミッドの参道の横にあった採石場の岩山を削って作られたと考えられている。カフラー王の河岸神殿は、赤色花崗岩で作られており、ソカル神の祭祀と関係があったと考えられている。

ギザの第3のピラミッドは、カフラー王のピラミッドの南西に位置し、後継者メンカウラー王のために造営されたものであり、「メンカウラーは神聖なり」と呼ばれた。先代の2つのピラミッドに比べて規模ははるかに小さい。カフラー王のピラミッドと同様に、メンカウラー王のピラミッドも、最下層が赤色花崗岩で覆われており、玄室は地下に作られている。メンカウラー王のピラミッドの河岸神殿は先王たちとは異なり、日乾煉瓦で仕上げられている。1908年に河岸神殿の発掘調査を行ったハーバード大学・ボストン美術館合同調査隊は、この河岸神殿内部から片岩製の一連の三神群像（トリアード）を発見している。

ギザのピラミッドは、王族と高官が埋葬されたマスタバ群に囲まれている。最大規模のマスタバ墓地は、クフ王のピラミッドの西、南、東に位置している。西と東の中心にあるマスタバは、クフ王のピラミッドと同時代のもので、規則的に並んでいる。カフラー王とメンカウラー王のピラミッドの南東の石切り場の岩肌には岩窟墓が造られている。

古王国時代以降、ギザ台地はしばらく放棄されたが、新王国時代に再び建築活動が行われた。第18王朝のアメンヘテプ2世は、大スフィンクスをホルエムアケト（「地平線のホルス神」）として崇め、神殿を造営した。この神殿は第19王朝のセティ1世によって増築されている。また、アメンヘテプ2世の息子のトトメス4世は大スフィンクスの両足の間に「夢の碑文」が記されたステラを建立している。

第3中間期にはクフ王の衛星ピラミッドのうちの南端にあるものが、イシス神殿となり、信仰を集めた。末期王朝時代第26王朝には、メンカウラー王のピラミッドが修復され、ギザ台地は再び広大な墓地として使われるようになった。

ギザ台地の南東には通称「カラスの壁 (Heit al-Ghourab)」と呼ばれる石灰岩でできた巨大な壁があり、ピラミッド複合体や貴族のマスタバがあるギザ・ネクロポリスと外の区域を仕切っている (Fig.8)。「カラスの壁」南には第4王朝時代後半に年代づけられる集落址が広がり (Fig.9)、1980年代よりアメリカのマーク・レーナーを隊長とする調査隊が発掘調査を継続している。

この集落は、便宜的にサイトAと呼ばれ、兵舎、パン焼き窯、王家の行政施設、東の町、エリート層が居住する西の町などで構成される。数少ない古王国時代の住居址として非常に重要な遺跡であり、今後の調査の進展が期待される。このサイトAの西側の斜面には、小型のマスタバ墓群があり、エジプト考古最高評議会が調査を継続している。1990年に発見されたこの墓地はピラミッド建設労働者の墓地と考えられており、大きく2つのエリアに分かれる。1つ目は、職人や労働者のリーダー格の人物の墓地で、2つ目は一般労働者の墓地である。これらの墓地は第4王朝から第5王朝末に年代づけられ、これまでの調査では全体の規模の約20%ほどしか明らかになっていないとされている²⁾。

ギザの遺跡管理計画はザヒ・ハワース長官が力を入れており、近年大きな進歩がみられている（詳細は次章参照）。調査は、エジプト考古最高評議会の他に、カイロ大学、アメリカのブラウン大学、マーク・レーナーを隊長とするアメリカ隊、ロシア隊、日本の早稲田大学の調査隊が調査を行っている。



Fig.8 ギザ、サイトAと「カラスの壁」



Fig.9 ギザ、ピラミッド建設労働者の町と墓地

(4) ザヴィエト・アル＝アルヤーン (Fig.10)

古王国時代のピラミッド2基とマスタバ墓群、新王国時代の墓地がある遺跡。ギザとアブ・シールの間位置する。2基のピラミッドのうち1基は「重層ピラミッド」と呼ばれ、おそらく古王国時代第3王朝のカーバ王のために造営されたと考えられている。84 m²の上部構造は、サッカラのセケムケト王の未完成ピラミッドとほぼ同じ大きさで、石材を斜めに積む築造技術を用いており、ともに本来は6段あるいは7段の



Fig.10 ザヴィエト・アル＝アルヤーン © Google Earth

階段状ピラミッドとして設計されていた。地下構造へはピラミッドの北部に垂直に穿たれたシャフトから進入するようになっている。シャフトの底からは3本の通廊が出ており、1本は南へ向かって埋葬室に通じ、他の2本はそれぞれ東西に向かい、そのどちらにも16の側室があった。これらの側室は、副葬品の貯蔵室として造られたと考えられている。

もう一つのピラミッドは、おそらく第4王朝のもので、アブ・ロアシュのジェドエフラー王のピラミッドに見られるような地下深くに穿たれた巨大な長い溝が特徴である。この溝の底では、特異な花崗岩製の楕円形の石棺が発見されている。このピラミッドの所有者に関しては、カフラー王とメンカウラー王の間に治世をもつ王と考えられており、ネブカー、ウヘムカー、バーカーという王名が候補として挙げられているが、不明のままである。

現在、ザヴィエト・アル＝アルヤーン遺跡の一部はエジプト軍の基地となっており、第4王朝の未完成ピラミッドは、この軍事基地内にある。それ以外の遺構については特に発掘調査や遺跡整備は行われていない。

(5) アブ・グラープ (Fig.11)

アブ・シールの北西に位置する遺跡。古王国時代第5王朝のニウセルラー王の太陽神殿の遺跡である。神殿の中核をなすのは、太陽崇拝の記念物であるベンベン石を模した巨大なオベリスクである。現在オベリスク本体は残存しておらず、残っているのは台座だけである。このオベリスクの前には屋根の無い中庭があり、その中央にはエジプト・アラバスターで造られた供物台がある。供物台はヒエログリフの「ヘテプ」を表す形を彫ったものに四方を囲まれた円盤の形をしており、全体は十字架のような形を呈している。供物台の北側には、屠殺場と神殿の倉庫がある。神殿の入口は、耕地際に向かって北東へ一直線に伸びる参道を通じて



Fig.11 アブ・グラープ © Google Earth

河岸神殿に繋がっている。また、神殿の南側には日乾煉瓦製の太陽の船の模型が造られていた。この遺跡は19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツ隊によって調査がおこなわれ、出土遺物の多くがドイツ各地の博物館に送られた。しかし、第2次世界大戦中にそれらの博物館が空爆を受けたために、そうした遺物の多くは破壊されてしまった。現在は、スペインの調査隊が三次元レーザー・スキャンニングを駆使した記録調査を行っている。

(6) アブ・シール (Figs.12, 13)

カイロから南西に約25kmの低位砂漠地帯に位置する遺跡。ギザ、サッカラ、ダハシュールと並んでメンフィス・ネクロポリスの重要なエリアである。アブ・シールの名前の由来はオシリス神の家を意味する「*pr-wsir* (ペル・ウシル)」のギリシア語訛りであると考えられている。

アブ・シール遺跡の中で特に重要な遺跡は、古王国時代第5王朝のピラミッド群と第5王朝の創始者ウセルカフ王の太陽神殿である。その他には数多くの古王国時代のマスタバ墓と、末期王朝時代の大型シャフト(竪坑墓)などがある。この場所に、最初に巨大記念建造物を造営したのは第5王朝のウセルカフ王で、自分のピラミッドはサッカラに造ったが、アブ・シールに太陽神殿を造営した。その後継者であるサフラー王は、初めてアブ・シールにピラミッド・コンプレックスを造営した。サフラー王のピラミッド・コンプレックスはピラミッド本体の規模こそは、第4王朝の王のそれに劣るが、葬祭殿、参道、河岸神殿の規模が大きくなっている。それにならって、ネフェルイルカーラー王、ネフェルエフラー王、ニウセルラー王もアブ・シールにピラミッド・コンプレックスを造営した。高官のマスタバ墓で最も規模が大きいのは、ニウセルラー王の親戚であった宰相プタハシェプセスのマスタバである。

アブ・シールの4基のピラミッドのうち完全な形を保っているのは、サフラー王のピラミッド・コンプレ



Fig.12 アブ・シール衛星画像 ©Google Earth

ックスで、河岸神殿、参道、葬祭神殿、ピラミッドから構成される。葬祭神殿の中庭は玄武岩が敷き詰められ、16本の赤色花崗岩製ヤシ柱の柱廊が取り囲んでいる。葬祭神殿の壁面の彩色レリーフは、現在カイロのエジプト博物館とベルリン・エジプト博物館に収蔵されている。葬祭殿にはその他に「彫像の部屋」、倉庫、至聖所がある。ピラミッド・コンプレックスの南東の隅には、小型の付属ピラミッドが造営された。

ドイツのボルヒャルトは、1902年から1908年にかけてサフラー王のピラミッド・コンプレックスを発掘した際に、サフラー王の葬祭殿の中庭でバステト女神の姿を表したレリーフを発見したが、この場所は新王国時代にバステト女神とセクメト女神の聖所として使用された。

続くネフェルイルカーラー王とニウセルラー王のピラミッドは未完成で保存状態はあまり良くない。これらのピラミッドの中心部は質の悪い粗石で造られていたため崩壊が激しく、特に外装の良好な石材が剥がさ



Fig.13 アブ・シール遺跡

れてしまったことで崩壊に拍車がかかってしまった。サフラー王のピラミッドの北西には、もう一つ未完成のピラミッドの遺構があるが、これはおそらく、ネフェルイルカーラー王の後に短期間王位についたシェブセスカーラー王のものだと考えられている。

アブ・シール遺跡は、1970年代以降、ヴェルナー率いるチェコ隊により調査が継続されている（Verner and Benešová 2008）。彼らの調査によりラーネフェルエフ（あるいはネフェルエフラー）王のピラミッド・コンプレックスが発見された。ピラミッド本体は未完成であるが、地下の埋葬室は使用された痕跡がある。葬祭神殿では、膨大なパピルス文書、印章、祭儀用品、彫刻群などの重要な遺物が発見された。また、チェコ隊はサフラー王およびネフェルイルカーラー王の母であるケントカウエス王妃の墓を発見している。さらに、同調査隊は周囲の古王国時代の王族および高官のmastaba墓の調査も実施している。第5王朝のピラミッド・コンプレックスの南西には末期王朝時代第26王朝から第27王朝の大型シャフト墓があり、チェコ隊は、1988年から1989年に、ペルシア時代のカンピュセス王とダレイオス1世の高官ウジャホルレスネトの墓を発掘し、さらに1998年には同時代の高官イウエフアアの墓を未盗掘の状態で見つけた。現在、この末期王朝の墓域でも調査は継続されており、重要な成果を挙げている。

アブ・シール遺跡は、一時、一般公開されたが再び観光客立ち入り禁止区域となっており、観光のための遺跡整備は行われていない。

(7) アブ・シール南 (Fig.14)

①古王国時代のmastaba墓群

アブ・シールのピラミッド群を調査していたチェコ隊は1991年よりアブ・シールの南東部の低位砂漠で



Fig.14 アブ・シール南衛星画像 ©Google Earth

調査を開始した。ここは所謂「アブ・シール湖」の岸辺にあたり、古王国時代の高官のmastaba墓が造営されている。最古の墓は第3王朝末のヘテピ墓で、アブ・シールおよびサッカラ地区で彩色レリーフの装飾のある最古の墓である。次の時代のmastaba墓は第5王朝前半のもので、重要な墓はカアペル墓である。最後の時代のmastaba墓は第6王朝末に年代づけられ、宰相カアルとその息子たちの墓がある。これらの墓はチェコ隊によって発見され、現在も調査が継続されている³⁾。

②アブ・シール南丘陵遺跡 (Fig.15)

チェコ隊が調査を行っているmastaba墓群の約500m西に小高い丘陵があり、1991年に日本の早稲田大学古代エジプト調査隊が調査を開始した。調査隊はまず丘陵の頂部から調査を開始し、新王国時代第18王朝のラムセス2世の第4王子カエムワセトの石造建造物址を発見した。また石造建造物の北西には周囲に空堀をめぐらした日乾煉瓦遺構を発見した。日乾煉瓦遺構からは第18王朝アメンヘテプ2世およびトトメス4世の名前が押印された煉瓦が出土しており、これらの王に関連する遺構であったと考えられている。また、2008年にはカエムワセトの石造建造物の北東約40mの地点から第19王朝のトゥーム・チャペル（神殿型貴族墓）が発見され、翌2009年には、埋葬室からイシスネフェルトという女性の石棺が発見された。

このアブ・シール南丘陵の南東斜面からは、初期王朝時代末から古王国時代第3王朝に年代づけられる石積遺構とそれに付属する地下室が発見された。地下室は、中王国時代に新たに前庭部を持つ入口が設けられ、西側に部屋が追加された。これらの部屋の内部からは初期王朝時代および中王国時代の遺物が出土している。また、この石積遺構から北東に約15mの地点からは岩窟遺構が発見され、内部からは中王国時代に年代づけられる遺物が出土した。さらに、石積遺構の背後からは第2中間期末から新王国時代第18王朝初期に年代づけられる集団埋葬が発見された。

以上のようにアブ・シール南丘陵の各遺構は1990年以降に発見されたもので、現在は発掘調査と並行して丘陵遺跡全体の保存修復および整備計画の策定を行っている。



Fig.15 アブ・シール南丘陵遺跡

(8) サッカラ

メンフィス・ネクロポリスの中心と位置付けられる大規模な墓地遺跡。王朝開闢の第1王朝からコプト時代（紀元後5世紀）までの長い期間に使用され、南北約40km、東西約6.2kmの範囲に広がる。サッカラの名前は、このネクロポリスの神ソカルに由来すると考えられているが、アラブの年代記作者は、この地域に

住んでいたアラブ部族の名前に由来すると述べている。

サッカラ最古の遺構は、北サッカラ (Figs.16, 17) の台地に南北に広がる第1王朝の墓地で、日乾煉瓦製の大型マスタバ墓が多数築かれた。さらに、サッカラに造営された最初の王墓は第2王朝のもので、第3王朝のジェセル王のピラミッド・コンプレックスの南からヘテプセケムイ王墓、ニネチェル王墓がある。最近の調査では、さらに南の新王国時代の墓地の地下から第2王朝の大規模な墓が発見されている。また、砂漠の西側では、第2王朝の王に帰属すると思われるギスル・アル＝ムディールを含む大周壁が検出されている。

サッカラ最古の遺構は、北サッカラの台地に南北に広がる第1王朝の墓地で、日乾煉瓦製の大型マスタバ墓が多数築かれた。さらに、サッカラに造営された最初の王墓は第2王朝のもので、第3王朝のジェセル王のピラミッド・コンプレックスの南からヘテプセケムイ王墓、ニネチェル王墓がある。最近の調査では、さらに南にある新王国時代の墓地の地下から第2王朝の大規模な墓が発見されている。また、砂漠の西側では、第2王朝の王に帰属すると思われるギスル・アル＝ムディールを含む大周壁が検出されている。

古代メンフィスの名称の一つである「白い壁 (イネブ・ヘジュ)」は、サッカラ台地の北東端に位置し、初期王朝時代の墓地が近い現在のアブ・シール村のあたりにあった可能性が高いと考えられている。初期王朝時代のサッカラは、この最初期のメンフィスの北に位置するアブ・シール湖から砂漠の奥部に広がるアブ・シール・ワディを中心に発展していったと考えられる。北サッカラの台地に築かれた大型マスタバ墓は次第に南に展開し、第2王朝の王墓地の北側に、第3王朝初代のジェセル王が葬祭コンプレックスを造営した (Fig.18)。ジェセル王は、最初に台形のマスタバ墓を造営したが、その後最終的に6段の階段状ピラミッドを完成させた。最終的な高さは約60mである。この世界最古の巨大石造建造物は、ジェセル王の宰相イムヘテプが考案したとされている。ジェセル王のピラミッド・コンプレックスは、ピラミッド本体の他に南の墓、北側に設置された葬祭神殿、ピラミッドの南東に位置するセド祭殿、南北のエジプトの祭殿、祭壇など



Fig.16 北サッカラ衛星画像 ©Google Earth



Fig.17 北サッカラ (中央はジェセル王の階段ピラミッド)



Fig.18 サッカラ、ジェセル王の階段ピラミッド

から構成されており、全長 1645m の巨大な石灰岩製の周壁に囲まれている。この周壁には、凸凹上の擁壁からなる「王宮ファサード」様式の装飾が用いられている。これらの建造物は、王宮等の木造建築を石造で表現している。ジェセル王の後継者セケムケト王はジェセル王のピラミッド・コンプレックスの南西に自らのピラミッドを造営したが、未完成のまま終わり、埋葬室に残された石棺の内部は空であった。その後、しばらくの間、サッカラは王墓地ではなくなり、第 4 王朝最後のシェプセスカフ王が南サッカラに石棺状の上部構造を持つ王墓を造営した。この墓は、現在「マスタバ・アル＝ファラオン」の名で知られている。サッカラの中心部に再び王墓が造営されたのは第 5 王朝になってからで、初代のウセルカフ王がジェセル王のピラミッド・コンプレックスの北東角付近に自らのピラミッドを造営した。しかし、ウセルカフ王の後継者たちは北のアブ・シールにピラミッドを造営した。同王朝のメンカウホル王が再びサッカラに王墓を築いたが、このピラミッドの位置は不明であった。ザヒ・ハワース長官は、2008 年にエジプト考古最高評議会が北サッカラの台地でメンカウホル王のピラミッドを発見したと報告している。メンカウホル王の後継者ジェドカーラー・イセジ王は、南サッカラにピラミッドを造営し、第 5 王朝最後のウナス王は、ジェセル王のピラミッド・コンプレックスの南西角付近にピラミッドを造営した。このピラミッドの玄室の壁には初めて「ピラミッド・テキスト」が刻まれた。第 6 王朝初代にテティ王は、サッカラの王のピラミッドで最も北に位置している。しかし、この王に続くペピ 1 世、メルエンラー王、ペピ 2 世などの他の第 6 王朝の王は、南サッカラにピラミッドを造営した。ペピ 2 世のピラミッド・コンプレックスを最後に古王国時代のピラミッドは姿を消し、第 1 中間期には第 8 王朝のイビ王のピラミッドのみが確認されている。イビ王のピラミッドは日乾煉瓦製で、かなり規模の小さいものであり、第 1 中間期の政治・経済の衰退を象徴している。

中王国時代から第 2 中間期にかけては、サッカラには王のピラミッドは造営されなかったが、中王国時代第 12 王朝に古王国時代のピラミッドの祭祀に関わった神官の墓が発見されている。しかし、古王国時代に比べると造墓活動は著しく停滞している。

古王国時代のピラミッドと同時期の貴族の墓が集中している地域は、ジェセル王のピラミッド・コンプレックスの北の地域と近年ようやく発掘調査が開始された西の地域である。その他の貴族の墓は基本的にピラミッドの周り位置し、マスタバあるいは岩窟墓の形式で造営された。

新王国時代になるとメンフィスが再び行政の中心となり、高官の墓が活発に造営されるようになった (Fig.19)。沖積地に面した砂漠の段丘には第 18 王朝中期以降の高官の岩窟墓が造営されており、アラン・ジビーを隊長とするフランス隊が、アメンヘテプ 3 世時代の宰相アペリアの墓、トゥトアנקアメン王の乳母マイアの墓などを発見している⁴⁾。さらに、ウナス王の参道の南では 1975 年より英国エジプト探査協会とオランダのライデン博物館の合同調査隊が新王国時代の高官の墓地の調査を開始し、第 18 王朝末から第 19



Fig.19 サッカラ、新王国時代の墓地衛星画像 ©Google Earth

王朝初期の高官の墓を発掘している⁵⁾。アクエンアテン王からトウトアंकアメン王に仕えたアテン大司祭メリネイト（メリラー）、王の執事プタハエムウイア、トウトアंकアメン王の治世の財務長官マヤ、軍司令官ホルエムヘブ、王のハーレムの長パイイ、ラメセス2世の財務長官ティアとその妻ティアなどの有力貴族の墓が集中している（Fig.20）。この墓地の北東にもラメセス2世の時代の高官の墓地があり、カイロ大学が調査を行っている。この中には宰相ネフェルレンペトの墓などが発見されている。これらの墓はトゥーム・チャペル（神殿型貴族墓）と呼ばれ、砂漠の平坦地に神殿のような形態の死者祭祀のための礼拝堂を造り、一般的に礼拝堂の中からシャフトが造られ埋葬室に通じている。特に第19王朝になると石灰岩のブロックで造営され、最奥部には小型のピラミッドが造られた。

さらに、サッカラの北西部にはアメンヘテプ3世の治世から聖牛アピスの埋葬地セラペウムが造営され、第18王朝からローマ時代の聖牛が地下回廊に埋葬された。末期王朝時代になると、聖なる動物の地下墓地が活発に造営され、数多くの聖獣が大量に埋葬されるようになった。ヒヒ、タカ、トキとともに「アピスの母」とされる雌牛、イヌ、ネコなどの動物が埋葬された。

末期王朝時代第26王朝および第27王朝の高官の墓は、ウナス王のピラミッド付近に位置している。これらの墓はアブ・シールの同時代の高官の墓と同様に大規模なシャフトを掘り込んだもので、埋葬室はその底に造られた。その他には岩窟墓が造られ、代表的なものはジェセル王のピラミッド・コンプレックスの東側の崖に穿たれたパーケンレンエフ王の岩窟墓である。

末期王朝時代第30王朝からグレコ・ローマン時代の墓は、ジェセル王のピラミッド・コンプレックスの周囲に築かれた。北側にはセラペウムへの参道があり、それに沿って墓が造られた。また西側にも大規模な墓地が展開しており、近年のポーランド隊の調査で多くの単純埋葬が発見されている。

さらに、コプト時代になるとウナス王の参道の南側にアバ・ジェレミア修道院が建てられたが、これは新



Fig.20 サッカラ、新王国時代の墓地、ホルエムヘブ墓、ティア墓

王国時代を中心とする墓の上部構造に使用された石灰岩を再利用して造られている。この修道院の時代には、ウナス王の河岸神殿付近に居住地があった。

近年、サッカラ地区では、エジプト考古最高評議会がテティ王ピラミッド墓地の北東部でウナス王の王妃でテティ王の母であるセシェト王妃のピラミッドを発見し、東部の斜面際でメンカウホル王のもののみられるピラミッドを発見した。同墓地ではオーストラリア隊が古王国時代のマスタバ墓と新王国時代の墓地の調査を行っている。

ジェセル王の階段状ピラミッドでは、エジプト考古最高評議会による保存修復作業が続けられており、その一環として大阪大学を中心とするチームが三次元レーザー・スキャンニングを行った。ジェセル王のピラ



Fig.21 南サッカラ衛星画像 ©Google Earth



Fig.22 南サッカラ、ペピ1世のピラミッド・コンプレックス

ミッド・コンプレックスの西側ではポーランド隊が古王国時代の墓地を中心に調査を行っている。エジプト考古最高評議会の調査隊もギスル・アル＝ムディール（Gisr el-Mudir）の東側で調査を行い、古王国時代および末期王朝の墓を新たに発見している。ジェセル王のピラミッド・コンプレックスの南側では、フランスのルーブル美術館の調査隊がウナス王のピラミッドの参道付近のアケトヘテプのmastabaで調査を行い、地下から未盗掘の末期王朝の木棺を多数発見した⁶⁾。また、関西大学の調査隊もジェセル王のピラミッド・コンプレックスの周壁の南側にある第5王朝のイドウトのmastabaの埋葬室で保存修復作業を行っている。ウナス王の参道の南側では、1975年より調査を継続しているオランダのライデン博物館・ライデン大学調査隊が新王国時代の墓地の調査を継続しており、アマルナ時代からポスト・アマルナ時代にかけての高官の墓を調査している。また、カイロ大学考古学部の調査隊もラメセス2世時代の高官の墓地を調査している。ジェセル王のピラミッド・コンプレックスの東側に位置するブバステイオンでは、アラン・ジビー率いるフランス隊が調査を継続している。

南サッカラ（Fig.21）では、ペピ1世のピラミッド・コンプレックス（Fig.22）をフランス・オリエント考古学研究所の調査隊が調査を継続し⁷⁾、さらに南に位置するタッバ・アル＝ゲイシでも同研究所が調査を行い、古王国時代と末期王朝時代の墓地を発見している⁸⁾。これより南に位置するペピ2世のピラミッド、第4王朝のシェプセスカフ王の墓である「mastaba・アル＝ファラオン」、第13王朝のケンジェル王のピラミッド周辺では恒常的な調査は行われていない。

(9) ダハシュール（Figs.23, 24）

カイロから南に約50kmの場所にあるメンフィス・ネクロポリス最南端の広大な墓域である。ダハシュール（Dahshur）の名は、おそらくウェネト・スネフェル（Weniset Sneferu）（「スネフェル王の聖所」の意）に由来すると考えられている。ダハシュールは古王国時代第3王朝から墓地として利用されていたが、最も発展した時代は、第4王朝のスネフェル王の治世で、治世第15年以降にこの地に王都を移し、2つのピラミッドを造営した。これらの2つのピラミッドは最初から真正ピラミッドとして設計されたものである。南側のピラミッドは今日「屈折ピラミッド」と呼ばれているが、本来は神聖ピラミッドとして計画され、建設途中に内部に亀裂が生じたために上部の体積を軽減させる理由から、途中で傾斜角を変えたので、そのような姿になったと考えられている。北側のピラミッドは、別名「赤いピラミッド」である。このピラミッドは、南の屈折ピラミッドの約2km北に立っている。最初から緩やかな傾斜角で造営され、最初の真正ピラミッドとして完成された。このピラミッドの基底面の面積はギザのクフ王の大ピラミッドに次ぐ。屈折ピラミッドから北東方向へ真っ直ぐ



Fig.23 ダハシュール衛星画像 ©Google Earth (赤ピラミッド (上) と屈折ピラミッド (下))

に参道が延び、その先に河岸神殿と呼ばれている遺構があるが、これは葬祭殿の一種と考えられており、河岸神殿はさらにその東側にあったと考えられている。

耕地際には、中王国時代第12王朝のピラミッドが3基ある。これらのピラミッドのコンプレックス内には、王妃、王女、高官の墓も含まれている。これらのピラミッドはいずれも日乾煉瓦で核が造られ、表面に良質の石灰岩が敷き詰められていた。しかし、今日ではこれらのピラミッドの表層石は再利用のために抜き取られ、崩壊している。アメンエムハト2世のピラミッドは、中世にアラブ人の採石場となったため、現在では石灰岩の石屑の山となっており、正確な規模は不明である。北に位置するセンウセレト3世のピラミッドは、1839年にヴァイスとペリングによって爆破されたため、上部構造が酷く破損している。現在では日乾煉瓦の山のような姿をしている。このピラミッド・コンプレックスは、南北に長い矩形の周壁を設けてお



Fig.24 ダハシュール湖からの眺め (右が赤ピラミッド、左が屈折ピラミッド)

り、サッカラの第3王朝のジェセル王のピラミッド・コンプレックスを模倣している。近年、アーノルドを隊長とするアメリカのメトロポリタン美術館の調査隊が再調査を行っており、王家の女性の副葬品などを発見している。アーノルドは、このピラミッドはセンウセレト3世の「空墓」であったと考えている。ダハシュール南地区あるアメンエムハト3世のピラミッドは、その黒い日乾煉瓦が剥きだした外観から「黒いピラミッド」と呼ばれている。このピラミッドもスネフェル王の屈折ピラミッドが造営された同じ地盤の弱い場所に造営されたため、途中で放棄されたと考えられている。ただし、王妃の埋葬には使用された。1980年代のドイツ考古学研究所による発掘調査によって、土器、儀式用煉瓦、鎮壇具などが発見された。

これらのピラミッドの他の中王国時代の遺構は、第13王朝のホル王の墓、第12王朝のサアセトのマスタバ墓、その他の高官のマスタバ墓群などがある。特にホル王の墓は未盗掘で発見され、カーの像が有名である。

現在ダハシュール地区では、シュタデルマンを隊長とするドイツ隊によるスネフェル王の屈折ピラミッドの葬祭神殿の調査、ドイツ考古学研究所による古王国時代のスネフェル王のピラミッド参道、マスタバ墓、中王国時代の墓地などの調査⁹⁾、メトロポリタン美術館の調査隊によるセンウセレト3世のピラミッドおよび周辺の調査、エジプト考古最高評議会によるサアセトのマスタバ墓の調査などが行われている。1990年代まで軍事エリアとして立入禁止地区であったが、近年観光客に開放され、遺跡の整備が進んでいる。

(10) ダハシュール北 (Figs.25, 26)

早稲田大学と東海大学の合同調査隊による人工衛星画像の解析によって1996年に発見されたダハシュール北部の広大な墓地。これまでの調査により中王国時代と新王国時代にネクロポリスとして発展していったことが明らかとなっている。中王国時代の墓はシャフト墓で、第12王朝末から第13王朝に年代づけられる



Fig.25 ダハシュール北衛星画像 ©Google Earth

埋葬が発見されている。未盗掘の墓が数基発見されており、内部からは彩色木棺、ミイラマスクなどが出土した。今後の調査の進展により、中王国時代の墓地の位置づけが重要な課題となると思われる。

新王国時代の墓地は、第18王朝後期から第20王朝に年代づけられる。遺構は、サッカラにも多くみられるトゥーム・チャペルとシャフト墓、土壙墓などである。最も規模が大きいのは第18王朝のポスト・アマルナ時代に年代づけられる高官イバイのトゥーム・チャペルで、埋葬室はラメセス2世の治世の高官メスに再利用された。イバイのトゥーム・チャペルの南東にはラメセス2世の治世の将軍パシェドウのトゥーム・チャペルがある。また、イバイのトゥーム・チャペルの西側は第19王朝末に年代づけられるタのトゥーム・チャペルがある。これらのトゥーム・チャペルの周辺にはシャフト墓と土壙墓が数十基存在している。

現在調査隊は、中王国時代のシャフト墓が確認されたタのトゥーム・チャペル周辺の調査を行っており、中王国時代および新王国時代末のシャフト墓を新たに発見している。また、遺跡保存のための調査も同時に継続されている。



Fig.26 ダハシュール北、早稲田大学調査隊発掘現場

註

- 1) フランス・スイス合同調査隊によるアブ・ロアシュの調査は <http://www.ifao.egnet.net/archeologie/abou-roach/> を参照。
- 2) マーク・レーナーを隊長とするアメリカ隊のギザ調査については、<http://www.aeraweb.org/> を参照。
- 3) チェコ隊によるアブ・シール地区の調査については、<http://egyptologie.ff.cuni.cz/?req=doc:abusir&lang=en&> を参照。
- 4) アラン・ジビーを隊長とするフランス隊によるブバステイオンの調査は、<http://www.hypogees.org/> を参照。
- 5) オランダ隊によるサッカラの新王国時代のネクロポリスの調査については、<http://www.saqqara.nl/> を参照。
- 6) ルーブル美術館のサッカラ調査は、<http://www.culture.gouv.fr/culture/arcnat/saqqara/fr/home.htm> を参照。
- 7) フランス隊のペピ1世のピラミッド・コンプレックスの調査は、<http://msaqqara.free.fr/> を参照。
- 8) フランス隊のタッパ・アル＝ゲイシの調査は <http://www.ifao.egnet.net/archeologie/tabbet-al-guech/> を参照。
- 9) ドイツ考古学研究所のダハシュールの調査については、http://www.dainst.org/index_858c1c3bbb1f14a187210017f0000011_en.html を参照。